

2017年11月11日(土)13:30~16:00

第82回 日本健康学会総会 サテライト・セッション

伝統的健康観と近代的健康観の相克と融合

第一部 研究発表

座長：ハイン・マレー（総合地球環境学研究所）
門司和彦（長崎大学）

発表者：

入口敦志（国文学研究資料館）	江戸時代の養生書刊行とその普及
岩間眞知子（日本医史学会評議員）	お茶と養生
浦山きか（森ノ宮医療大学）	『医心方』の身体観と養生
叢麗（広島国際大学）	伝統中医学と現代作業療法
野林厚志（国立民族学博物館）	健康を維持するための料理 —台湾原住民族の食文化—

第二部 パネルディスカッション

座長：逢見憲一（国立保健医療科学院）
パネリスト：

門司和彦（長崎大学）
野林厚志（国立民族学博物館）
入口敦志（国文学研究資料館）
ハイン・マレー（総合地球環境学研究所）

【サテライトセッション趣旨】

伝統的健康観と近代的健康観の相克と融合

ハイン・マレー (Hein Mallee)

総合地球環境学研究所 研究基盤国際センター 教授

ここ 150 年の間に、人類が直面する健康に関する主要課題、疾患や病気に関する科学的知見、さらに健康そのものの概念は、大きく変化した。細菌論の出現や現代医学の進展に伴い、健康と疾患に関する、体内バランスや、(環境と精神の両面における) より広い世界との調和に関する前現代的な考え方は衰退した。

東アジアでは、「健康」、「衛生」のように健康に関する新たな概念を土地の言葉で表す語彙が作り出された。しかしながら、20 世紀後半には、放射能や殺虫剤及び工業化学物質が人間の健康に及ぼす影響が明らかになり、環境を重要な側面とする認識が再び高まった。

より裕福に、より便利になることは、初めは人間健康の向上に貢献したが、次第に「生活習慣病」を誘発し、寿命が延びるにつれ、変性疾患が顕著になり、より包摂的で前向きな健康への取り組みを求める声が大きくなった。

ワクチンの技術により、多くの感染症の脅威は減少したが、21 世紀初頭には、SARS や鳥インフルエンザのような「新興感染症」が地球規模のパンデミックを引き起こすのではないかと懸念が広まった。

最後に、人口は高齢化社会に推移しており、医療や介護制度にかかる費用の負担は今後益々増大する。上記の様々な状況変化の結果、比較的狭義であった生物医学的な健康という概念が、環境ともつながった、包摂的で前向きな概念に変化しつつある。

本サテライトセッションでは、これらの背景を踏まえ、「伝統的な」健康に関する考え方が、21 世紀に人類が直面する課題にどのような意味を持つかを議論する。

過去を過度に回顧趣味的に理想化することを避け、本セッションでは、人文学と社会科学から複数の研究者を招き、前近代の健康への取り組み事例を発表いただき、続くパネルディスカッションで、これらの経験を現代の課題と文脈に置いて議論を深める。

○代表的な業績

1. **Hein Mallee** (2017) “The Evolution of Health as an Ecological Concept” *Current Opinion in Environmental Sustainability* 25:28-32. (<https://doi.org/10.1016/j.cosust.2017.04.009>)
2. Asakura, Takeshi, **Hein Mallee**, Sachi Tomokawa, Kazuhiko Moji and Jun Kobayashi (2015) “The ecosystem approach to health is a promising strategy in international development: lessons from Japan and Laos” *Globalization and Health* 11:3 (DOI 10.1186/s12992-015-0093-0)
3. Hung Nguyen-Viet, Siobhan Doria, Dinh Xuan Tung, **Hein Mallee**, Bruce A Wilcox and Delia Grace (2015) “Ecohealth research in Southeast Asia: past, present and the way forward” *Infectious Diseases of Poverty*, 4:5 (<http://www.idpjournals.com/content/4/1/5>, doi:10.1186/2049-9957-4-5)
4. Johanne Saint-Charles, Jena Webb, Andres Sanchez, **Hein Mallee**, Berna van Wendel de Joode, and Hung Nguyen-Viet “Ecohealth as a Field: Looking Forward”, published online in *EcoHealth* (April 2014, DOI: 10.1007/s10393-014-0930-2).
5. ハイン・マレー 「エコヘルスをめぐる世界の動向」医学の歩み、Vol. 249, No. 2, 12 April 2014: 184-189.

○プロフィール

ハイン・マレーは、オランダのライデン大学から博士号を取得した、社会科
学者である。当初、中国における人口移動および関連政策の研究を行っていた
が、国際開発の分野に従事し始め、中国や東南アジアにおける農村開発、自然
資源管理、貧困軽減に携わるようになった。この間の主なテーマは、資源に対
する現地の人々の関わりと権利であった。直近の10年は、現地の人々の参加や
農村開発の経験を基に、人間の健康と環境（「エコヘルス」）に関する諸問題
に取り組んでいる。マレーは、2013年より総合地球環境学研究所（京都）の教
授として、Future Earthアジア地域センターの統括に当たっている。

【パネルディスカッション趣旨】

健康と疾病の原因に関する科学的アプローチの変遷

門司 和彦

長崎大学 熱帯医学・グローバルヘルス研究科 教授
(国際健康開発コース長)

第2次大戦後、抗生物質とワクチンの開発・普及、生活環境・衛生・栄養の改善等により、先進国において感染症は主要な死因ではなくなっていく。結核は、1925年から1950年まで日本の死因の第一位を占めていたが、慢性疾患に首位の座を明け渡した。慢性疾患が中心となる「健康転換」が起こるにつれて、対象集団から生物統計学的に意味のある無作為抽出されたサンプルを用いて、厳密に交絡因子を除外し、一つの特異的な暴露と一つの特異的な結果の関係を厳密に評価する疫学手法が医学・公衆衛生学の中心的な方法となる。戦後、米国マサチューセッツ州で実施されたフラミンガム研究から、リスク要因という概念が提出され、単一原因ではないが、疾病の発生や死亡に関連する要因として、喫煙や、塩分摂取量、肥満等が抽出され、リスクの研究が進む。慢性疾患に関連する要因群は多様であり、発病までの経過時間が長く、結果としての病気も多様である。一つの病因が一つの結果だけに結びついているわけではない。喫煙、飲酒、食物摂取、運動や日常生活活動は、様々な癌やその他の慢性疾患と関連している。にもかかわらず、疫学方法論、生物統計学、コンピュータ能力の発展に支えられた、病原体説の流れを組んだ特定リスクの究明研究が推し進められた。

近代疫学は個人のライフスタイルと慢性疾患の関連を証明することに成功し、非感染症対策に大いに貢献した。その一方で、原因を個人の責任に帰することに対する批判が、民主的な健康増進を主張する人々からあがり、1986年の健康増進に関するオタワ宣言に結実していく。個人の不健康な生活習慣は、その背後にある貧困や差別、都市生活環境の悪化などと切り離すことはできず、個人の健康増進を支持する社会や環境の構築に力をいれる新公衆衛生運動となっていく。社会疫学が登場し、個人の特性だけでなく、個人が所属する集団の社会経済的な特性が大きな疾病構造を規定していることが明らかになっていく。

この状況で、近代疫学と社会疫学の議論が活発になった。また、個人のライフスタイルをリスクファクターとする近代疫学は、社会疫学と同様に、病気の機序の解明に貢献していないとの批判が分子疫学から上がった。分子疫学でも

疾病の機序を明らかにすることは容易ではないが、近代疫学は、真の機序をブラックボックス化していると批判された。

コロンビア大学の Susser らは、社会疫学、近代疫学、分子疫学のすべてのレベルが重要であり、それを統合した生態疫学 *ecoepidemiology* の必要性を論じた。さらに、McMichael は、社会的背景だけでなく、地球環境変化等の長期的影響を考えること、また、Barker らによって報告された胎児期や幼少期の低栄養やストレスが成人病のリスクを高めることなど、ライフコース全体で健康と疾病をみることの重要性を指摘した（門司・西本，2017「人類生態学からみた顧みられない熱帯病対策」別冊・医学のあゆみ『グローバル感染症最前線（北潔編）』より）。

本パネル討論では健康の疾病の原因に関する科学的アプローチの変遷を議論したい。

○代表的な業績

1. 門司和彦他編著（2014）「エコヘルス：21 世紀におけるあらたな健康概念」別冊「医学のあゆみ」医歯薬出版
2. 渡辺知保、門司和彦他著（2011）「人間の生態学」朝倉書店
3. ジェイムス・ライリー著，門司和彦他訳（2008）「健康転換と寿命延長の世界誌」明和出版

○プロフィール

1975 年東京大学医学部保健学科卒、保健学博士。専門は人類生態学、エコヘルス研究。東京大学助手、長崎大学医学部助教授、ケンブリッジ大学客員研究員、長崎大医学部保健学科教授、熱帯医学研究所教授、総合地球環境学研究所教授を経て、2013 年長崎大学大学院国際健康開発研究科教授。2015 年より熱帯医学・グローバルヘルス研究科教授。地球研で「エコヘルスプロジェクト」のリーダーを務め、ラオス等での環境と健康の研究に従事。

江戸時代の養生書刊行とその普及

入口敦志
国文学研究資料館・准教授

日本語の表記は、漢字・カタカナ・ひらがなの三種類の文字を使うという点で、他の国にない特徴を持っている。単に便宜として使い分けているだけではなく、その使い方には思想的な背景がある。特に江戸時代初期、十七世紀初頭から出版が盛んになると、その傾向は一段と深まっていく。

日本においては、思想あるいは医学などの高度な科学的な知識は漢文で書かれていることは当然のことであった。一方、普及のためにひらがなに和らげたものが現れるようになるのが、ちょうど出版が盛んになる十七世紀の初頭であった。出版の隆盛とひらがな文による知識の普及には密接な相関関係が認められるのである。

そのことを探る例として『延寿撮要』という書物を取りあげて、知識普及の様態をみてみたい。

『延寿撮要』は曲直瀬玄朔（1549-1631）が慶長四年（1599）に著作したものである。もともと天皇や大大名の診療をする高位の医者であったが、罪を得て常陸国に流罪となる。その間、土地の民衆が医学知識もなく若くして死んでいくことに心を痛め、医学知識の普及のために書いたものである。よって、民衆の為にひらがなを用いて書いたということが、著者自身によって語られている。ただ、この時代に関していえば、実際にひらがなを読めた民衆はそれほど多くなかったと考えられる。室町時代までは、文字に関していえば、それを仕えるのは公家や上級の武家に限られていた。その階層の中で、長幼・性別などによって使う文字種が違っていたのである。

『延寿撮要』は江戸時代に何度か刊行されているが、注目すべきは寛政十二年（1800）に刊行されたものである。これはタイトルが『延寿養生』と変えられているのだが、当然のこと著者が指示したものではなく、出版者が勝手に変えたものである。また、文字も『延寿撮要』と同じひらがなではあるが、草書体のくずし字となり、漢字にはすべてルビが振られている。江戸中期であれば、くずし字のひらがなを読める層は相当に多くなっていたと考えられている。識字率が上がったのである。それとともに、タイトルも馴染みのある「養生」に変えられたものと推測する。

ここでは『延寿撮要』の例を見てみたが、このような現象はほかの医学書にも見られる。江戸時代を通じて、簡単な医学知識はひらがな本の出版をとおして広がっていった。幕末には、生活に必要な様々な情報を集大成した「往来

物」や「重宝記」という書物が出版されるが、その中にも医学知識が多く収録される、より広く普及していくこととなる。

○代表的な業績

単著『武家権力と文学 柳宮連歌、『帝鑑図説』』（2013年7月、ペリかん社）

単著『漢字・カタカナ・ひらがな 表記の思想』（2016年12月）

共著『徳川家康 その政治と文化・芸能』（2016年6月、宮帯出版）

共著『夢見る日本文化のパラダイム』（2015年5月、法蔵館）

○プロフィール

九州大学大学院修了。九州大学文学部助手を経て現職。博士（文学）（九州大学、2009年）。江戸時代の学芸についての研究を専門とする。最近は、東アジアにおける出版文化のなかに日本を位置づける研究を行っている。

お茶と養生

岩間眞知子

日本医史学会評議員

元・東京国立博物館特別研究員

「養生」とは、生命を養って長生きすることをいい、『莊子』の〈養生主〉には「人の生は気の聚まりなり。集まれば即ち生となり、散ずれば、即ち死となる」とあり、万物の生成消滅は、気の離散集合にあるとした。そこで気を自由にコントロールし、不死の仙人となることを目的とする神仙術と繋がる。一方、魏の嵇康は《養生論》で、精神を養う〈養神〉と肉体を養う〈養形〉の両面から養生を論じた。

中国宋に渡った日本僧・栄西が著した『喫茶養生記』（1211,1214年）は「茶は養生の仙薬なり」で始まる。栄西は仏教徒であるのに、茶を「仙薬」神仙思想の不老長生の薬とする。仏教と神仙思想は矛盾するようだが、「健康で長生き」は人間の根源的な欲求である。キリスト教でも、幸せのために病と闘う。

栄西は「命を守るためには、養生しなくてはならない。それには五臓、とりわけ五臓の主たる心臓を良くすれば、健康になる。苦味のある茶を喫めば心臓が良くなり、万病が除かれる」と説く。さらに密教の加持祈祷が伴わなければ病気の根治には至らないともいいながら、密教の祈祷より、茶と桑の服用を強く主張する。

栄西の著述の動機は、末世の群衆を救うことで、健康の維持増進のために茶と桑を勧めた。だが、そこでは中国養生論に見られる、導引・服気・房中・辟穀などの道術には一切触れていない。茶と桑を勧めたのは、その底流に禅と係わりの深い茶（座禅の折に眠気を覚まし、『禅苑清規』に茶礼がある）と、諸仏・菩薩の木である桑（釈迦が悟りを開いた菩提樹）であるという栄西の思いがあったためと考える。

栄西の願いは功を奏し、茶は急速に広まり、日常生活に欠かせないものとなる。その茶を、養生から考察したのは、江戸時代の貝原益軒である。益軒は『養生訓』の「飲茶」で「茶は玩賞して日用欠かせないもの」とし、茶の「性質は冷で気を沈め、眠りを覚ます」という。唐の陳臓器や母昃・蘇東坡・李時珍などは茶の害も述べるが、朝から晩まで日々茶をたくさん飲んでいいる人も多い。飲みなれると、体を損なわないのだろうか、と疑問を呈し、「冷物なので、一時に強い抹茶を多く飲んではいけませんが、煎茶は炒り煮るので、やわらかい。そこで普段は、煎茶を飲むと良い。食後に熱い茶を少し飲んで、消化を

促進し、渴きを止める」と答え、自ら美味しく淹れる方法を試し、気分を爽やかにし、虫歯を防ぐなどの長所を述べる。ここで益軒が言う煎茶は“炒り煮る”とあるので、釜炒り茶や番茶であろうと思われる。釜炒り茶は、成分がゆっくり滲出するので、体への刺激や負担が少ない。煮て作る番茶はさらに優しく刺激が少ない。このように、お茶といっても多様性があり、体に及ぼす効果も多様である。多様なお茶を、体調に合わせて選び、楽しみ養生に役立てることができる。

「お茶にしましょう」と、お茶は人と人をつなぎ、「もてなしの心」を育み、更に茶の湯という芸術、精神文化を産み出した。一方、明の張源『茶録』に「お茶を飲むには、人数が少ないのが貴い。客が多ければ喧しい。喧は雅趣に乏しい。独り飲むのは神」とある。一人読書する時、あるいは創造の合い間、音楽を聞き、香をたいて、静かに好みのお茶を、気に入った茶器で、ゆったりといただく。その時、お茶は真の姿、馥郁とした深く豊かな香りや味わいを見せてくれる。茶は身体だけでなく、精神にも影響を及ぼす。

健康で長生きといっても、健康は目的ではなく、あくまで充実した人生を送るためのものであろう。2000年以上も人類とともにあったお茶の美味しさとともに、体や心に及ぼす効能も十分に活かして、健康でいきいきと充実した人生を送り、夢を叶え、天寿を全うする、そこにお茶と養生の意味もあると考える。

○代表的な業績

思文閣出版『茶の医薬史-中国と日本』2009年、静岡県茶業会議所『栄西と「喫茶養生記」』2013年、大修館書店『喫茶の歴史 茶薬同源をさぐる』2015年。共著に「煎茶と文人画」『日本美術襍稿』明德出版社1998年、「中国医薬書から見る茶」『中国茶事典』勉誠出版2007年、「古典にみる茶の効能」『新版茶の機能』農文協2013年、「曲直瀬道三と茶」『曲直瀬道三と近世日本医療社会』(財)武田科学振興財団2015年。

○プロフィール

1978年、早稲田大学文学研究科(美術史)修士課程修了。東京国立博物館科学研究費特別研究員、日展史編纂委員など。日本食生活文化財団(2006年)、三徳庵大日本茶道学会(2008年)、武田科学振興財団杏雨書屋(2016年)から、刊行・研究助成を受ける。

『医心方』の身体観と養生

浦山きか

森ノ宮医療大学保健医療学部鍼灸学科・客員教授

『医心方』は、丹波康頼（912～995）の編撰になる総合性医書で、全 30 巻、永観 2（984）年に円融上皇に奏進された。

本書の記述はほぼ中国の六朝・隋唐および朝鮮の医薬関係書からの引用で構成され、多くは隋の『諸病源候論』によって病目を分かち。引用書は百数十種に及ぶ。富士川游『日本医学史』の説く平安時代の各科の医学は、ほぼ全てを『医心方』に取材する。

内容は巻毎にまとめられ、巻第二十七・巻第二十八の両巻のみ、それぞれ巻第下に「養生」「房内」と題されている。巻第一は全体に対する総論であり、巻第二は鍼灸を内容とし、孔穴とともに身体の見取り図を示す。巻第三から巻第八は身体を上部から下る順で病を列挙し、巻第九から全身性の病門・病目ごとにまとめ、巻第十九から巻第二十は服石と解散、巻第二十一から巻第二十四は産科と婦人科、巻第二十五に小児科、巻第二十六は延年、巻第二十九に飲食禁忌、巻第三十に「五穀」「五菜」等が記される。

巻第一は「治病大体第一」より始まり、『医心方』全体の序例となっているのは、『千金方』の「序例」に倣う。『千金方』は『日本紀略』によれば遅くとも 820 年には日本に存在し、その影響は後世に及び、特に「大医精誠」を含む第一巻のそれは大きかった。

同巻同篇には、「…故に『世尊親説医方経』に曰く、四大調はざる者は、一に寢嚙（ルロ）、二に變跛（セウバ）、三に畢哆（ピッタ）、四に婆多（ヴァタ）。初めに則ち地大增して、身をして沈重せしむ。二に則ち水大積して、涕唾常より乖く。三に則ち火大盛んにして、頭胸壯んに熱す。四に則ち風大動じて、氣息撃衝す、と」という。全巻を通じ病理論はこれのみである。

同巻同篇には『最勝王経』も引かれているが、「病機」「治則」に属する内容のほか、「先起慈憫心、莫規於財利＝医療行為に先立つのは慈悲の心」であるといい、『千金方』「大医精誠」の内容にも通じるものである。

同巻「服薬節度第三」の冒頭は、『千金方』から三例を引用しているが、その中に「又云く、夫れ医を為す者、當に須く病源を洞視し、其の犯す所を知り、食を以て之を治す。食療して癒えざれば、然る後に薬を命ず」とあり、まず「食療」を行い、それで癒えなければ薬によって治療すると記されている。巻第二十七の「養生巻」巻頭「大体第一」は、続く巻第二十八から巻第三十を

統括する位置にあるが、冒頭には『千金方』卷二十七「養性」から「夫養性者、欲所習以成性、性自為善、不習無不利也、性既自善、内外百病皆悉不生、禍乱災害亦無由作、此養性之大經也...」を引いている。

以上によって『医心方』の医学をまとめると、病理としてはインド医学と仏典に拠り、その運用に関しては中国医学に基づき、「養生」については特に『千金方』を中心に構築したということになる。いわば「仏魂漢才」の医学であったといえよう。

○代表的な業績

単著『漢文で読む『靈枢』』（アルテミシア。2006年刊行）、第21回間中賞受賞。『中国医書の文献学的研究』（2014年、汲古書院、日本学術振興会平成25年度科学研究費成果公開促進費255010）。共著に石田秀実・白杉悦郎監修『黄帝内経靈枢』（東洋学術出版社、1999年）など、論文に「中国伝統医書中「禁忌」的変遷」（『従医療看中国史』所収、台湾・聯経、2008年）など。

○プロフィール

2000年東北大学大学院文学研究科後期課程（中国哲学科）修了、博士（文学、東北大学）。現在、東北大学、東北医科薬科大学、赤門鍼灸柔整専門学校にて非常勤講師。2012～2014年度JSPS科研費24590642「日本伝統医学における基礎理論の基盤整備」、2015年度より国文学研究資料館・共同研究「アジアの中の日本古典籍—医学・農学・理学書を中心として」に参加中。

伝統中医学と現代作業療法

叢 麗

広島国際大学総合リハビリテーション学部講師

伝統中国医学の観点では、自然界の物事は全て“陰陽・五行”の性質を持ち、相互に影響しあっている。人も自然界の一部分であり、常に自然の影響を受け、自然と調和しながら自分自身を調整しながら病気を闘うシステムである。一方現代作業療法は人間と作業を全体的にホリスティックに捉えていた時代と、人間と作業を最小の要素に分析して見ようとする要素還元主義の時代があったが、現在では両者を統合する時代とされている。伝統中医学と現代作業療法は同じように人間を包括的なシステムと認識しているかについて、伝統中医学の歴史上の事例を通して分析していく。

西洋医学は19世紀から中国に導入されたが、それによって数千年の伝統中医学が排除されるということはなく、西洋医学と伝統中国医学は併存し発展してきた。このような背景の中で、作業療法は1980年代に西洋から中国に導入された。その一方、伝統中医学の中では、園芸、読書、書道、気候などが、康復養生療法として用いられている。伝統中医学の養生療法は、表面的に作業療法に類似していますが、実際には別の理論体系を持っている。

本研究では、伝統中医学の中で作業を用いた80の症例を中医学基礎理論と作業療法理論で分析した。80の記述は、原始社会のBC16世紀から、清の時代のAD1860年までに及んでいる。宋以前の各時代では記述された例が少なく、宋・明・清の時代になると、経済・技術・医学の進歩にともない、記載数は大幅に増え、《太平広記》、《寿親養老書》、《儒門事親》などに記述されていた。用いられていた作業は22種類で、楽器演奏と書道は最も多く各9件、次いで気功は7件でした。これらは、セルフケア、仕事活動、余暇活動とその他に分類できました。用いられた理論は陰陽五行説、気血経絡と臓腑機能理論、天人相応形神一体、三因制宜、治病求本、治未病である。陰陽五行説とは、自然界及び人間界の事物は、すべて“陰陽”と“五行”の性質をもち、常に相互に影響し転化する。人の感情は基本的に、喜、思、悲、恐、怒の5つに分けられ、五行説によって相互に影響しています。例えばうつ病に室外で楽しい園芸をすることによって、自然界の陽気を受けて症状がなくなると記載されていた。

即ち、現代的作業療法では、作業選択を個人の価値、興味、習慣、役割などによって捉え、人を身体、認知、感情、精神的な側面から捉えている。中医学では、宇宙の中の人は、日常生活の中で自然と融合しながら、自分自身のバランスを調整し、健康を得る。現代的作業療法は、個人の意志、価値観や興味を重視するものになっているが、中医学の人が自然の一部分である観点は、現代

作業療法から見れば、新たな観点となりうる。現代的作業療法のホリスティックな考えより、更に大きなホリスティックな観点を持つように思われる。一人ひとりにより良い医療サービスを提供できるように包括的に関わることを期待されている。

○代表的な業績

1. Li Cong and Tamako Miyamae : Therapeutic use of occupation in Traditional Chinese Medicine, 16th WFOT Congress 2014.
2. Li Cong and Tamako Miyamae :Meaningful Occupational in Care Health Facility ~ A case study of elderly's ADL with knees deformation and hemiplegia~ The 8th Beijing International Forum on Rehabilitation.
3. Toshihiro HONKE, Takashi YAMADA, Yoshikazu ISHII, Norikazu KOBAYASHI, Li CONG: Development of the Elderly Version of Leisure-time Activity Enjoyment Scale, The 8th Beijing International Forum on Rehabilitation, 2013.
4. CONG Li, HUANG FuBiao, WANG XiaoLong: Forefront of Occupational therapy for dementia and perspective, The 9th Beijing International Forum on Rehabilitation, 2013.

○プロフィール

叢 麗（ツォン・リー）：山東中医薬大学・北京大学光華管理学院を卒業。1998年に来日、広島大学大学院を経て修士学位（保健学）及び作業療法士資格を取得後、老人保健施設べにまんさくの里で実務経験に励み、専門分野は老年期作業療法で、伝統中医学についての研究及び内部疾患の作業療法などに取り組んでいる。広島国際大学総合リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻専任講師。

健康を維持するための料理 —台湾原住民族の食文化—

野林厚志

国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授

人類が生み出してきた数多くの文化装置の中で、他の動物に対して人間が生態学的な優位性を得るうえで大きな役割を果たしてきたものが料理である。生態資源をそのまま摂取する動物の摂食行動と人間のそれとの大きな違いは、生態資源を組み合わせ、さらに外部のエネルギーを用いて加工することによって、生命体そのものが行う咀嚼や消化を代替させ、より有利な条件で生命体を維持させていくことである。マイケル・ポーランの言葉を借りれば、料理とは「生の食材を栄養ある魅力的な食べ物に変えるあらゆる技術」という定義が可能となる。そして、料理には一定の手順や決まった方法があり、それらは料理を作る人間によって伝達され、継承されていく。こうした性質をもつ料理は、日常生活において人間の生態学的、栄養学的充足を果たし、儀礼や共食といった社会関係の充足にも寄与してきた。

発表者が調査をしてきた台湾の原住民族が行うアワの共食や、儀礼の際には狩猟によって得られた野生の獣肉が必要になるといったこと、それらが人々に提供されていく特有の形態は、先人たちの慣習的な行為を重ねながら継承することによって社会の中に確立していった。

一方で、物流環境や食品の保存環境の変化は原住民族の人々の食生活にある意味では画一化させてきた。施政者の料理である「中華料理」の食材や調理法が原住民族の食生活に浸透し、この数十年のうちに、食事の先住民性は原住民族の日常生活の中から姿を消したかのように見える。これに対して、1980年代以降の台湾社会の民主化に連動し、原住民族のエスニシティがそれぞれの民族集団の独自性や、原住民族全体として他の民族集団との差異化をはかるようなかたちで少なからず表象され、原住民族が自然環境と調和した民族であるといふなかば理念的な姿を描きだすうえで適した要素としての料理に関心がよせられるようになった。野生動植物を獲得し、山間部で機械化されない農耕活動を通して伝統作物を作り、伝統的な手法をもって料理を作るという食文化が記述され、また、観光産業等とむすびついて実践されてきた。

その中には、原住民族の人々が継承させてきた生態資源に関する豊かな知識がまだ息づいていることが少なくない。本発表ではそうした食文化が継承されてきたことの背景に、健康の維持という機能があることについて考えてみたい。具体的には、パイワン族の食生活の中で特定の植物が、伝統的な料理の中に現在でも用いられることに着目し、健康という目的が食文化を維持させる役割を果たしていることについて論じる。

○代表的な業績

『台湾インノシシを追う——民族学と考古学の出会い』臨川書店 2014

『インノシシ狩猟の民族考古学 台湾原住民の生業文化』御茶の水書房 2008

○プロフィール

1967年、大阪府大阪市生まれ。東京大学大学院博士課程中退。博士（学術）。日本学術振興会特別研究員、国立民族学博物館第3研究部助手等を経て、現在、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授。専攻は人類学、民族考古学、物質文化論。台湾原住民族のエスニシティ、人間と動物との関係史、食の文明論が主要な研究テーマ。最近では、現生人類の特徴としての道具作りと料理に焦点をあてた調査研究を行っている。